

文学のなかの
朝鮮人像

高崎隆治著

青弓社

高崎隆治著

文学のなかの
朝鮮人像

青弓社

高崎隆治（たかさき りゅうじ）

一九二五年生まれ。

法政大学文学部国文科卒。

立教大学文学部講師、講談社「昭和萬葉集」
編纂委員などを経て、現在、法政大学文学部
講師。

主な著書『戦争文学通信』『戦時下の雑誌』
『戦時下文学の周辺』（風媒社）『無名兵士の
詩集』（太平出版社）『危うし!? 文藝春秋』
（第三文明社）ほか。

文学のなかの朝鮮人像

一九八二年四月二十二日 第一版第一刷発行

定 価 一六〇〇円

著 者 高崎隆治

発行者 矢野恵二

発行所 株式会社 青弓社

東京都千代田区三崎町二一十二
電話（〇三）二六五—八五四八

発売所 株式会社 創林社

東京都千代田区三崎町二一十二
電話（〇三）二六五—八〇七七

印刷所 須藤印刷

製本所 昇栄社

©Ryujii Takasaki 0095—5004—4281

文学のなかの朝鮮人像／目次

文学者にとって朝鮮とは 7

日本文学者のとらえた朝鮮 27

高浜虚子の『朝鮮』を解剖する——総督は何を読みとったか 38

俗流「内鮮一体」小説の擬態——中本たか子「島の挿話」 53

奪われた大地——前田河広一郎「火田」 67

『朝鮮歌集』の貧困 81

八月十五日の演劇人——村山知義小説集『明姫』 94

徴兵制の布石・映画「望楼の決死隊」 109

日本文学者の見た朝鮮——作品年表 122

Ⅰ

金史良「乞食の墓」 135

金史良「乞食の墓」について 145

Ⅲ

金史良への視座 149

李光洙「嘉実」ノート 170

あとがき 188

装丁・鈴木
堯

文学者にとって朝鮮とは

1

数年前だが、十五年戦争下の「満州」について、日本の文学者たちが何を考え何を感じていたか、つまり、彼等にとって、「満州」とはなんであったのかということテーマにして、できれば時代を明治にまでさかのぼって追求してみようと計画したことがあった。

そのために、私は一時的に、みずからのライフ・ワークと定めている日中全面戦争から敗戦までの間に書かれた戦争文学の研究を中断させて——といっても完全に断ったわけではないのだが、ともかく重点をそちらに移しかえて、「満州」にかかわる資料を、文学以前の、たとえば開拓村の実態や開拓史といったところまで掘げて読みあさり、収集したのであった。その結果、文学者たちが「満州」をどういうようにとらえ、そしてそれをどうしようと考えていたかというおおよそのところまでは判ったように思えた。

だが、さてそろそろペンを執ろうという段階になって、その少し前から私の内部に徐々に首をもちあげはじめた一つの大きな懷疑に私はつきあたってしまったのである。もちろん、私はそこでためらうことなく、そのまま問題をぐりぬけようとすればそれも可能であったにちがいないのだが、しかし、私をしてどうしてもそこに立ち止まらせずにはおかない、なにか巨大な力が主題の内と外から同時に働いているのを自覚しないわけにはいかなかった。もちろんそれが、私のこれまでのありようと無縁でないことはことわるまでもない。

いってみれば、それはなんの変哲もないごく平凡なことで、つまり、「なぜ満州なのか」という私に対する問いかけである。にもかかわらず、その問いに対して、私が一種のうしろめたさとともにたじろがないわけにいなかったのは、あの戦時下に「満州」へ旅立った日本の作家たちのほとんどすべてが、朝鮮を経由しながらそこを素通りして、ひたすら「満州」を目指したことで、現在の私が、なぜか朝鮮をぬきにして、いきなり「満州」を考えようとしたことが、どこかで明らかに通底しているのではないかという自省が湧き出したからである。

むろん私は、十五年戦争下の戦争文学の研究者として、朝鮮が中国侵略の兵站基地として日本帝国主義の犠牲に供せられていたことは熟知していたし、そのために受けた朝鮮人民の痛苦のほど、私なりに考えていなかったわけではない。したがって、「満州」のつきには朝鮮を主題に

選ぶつもりであったと、自身に向けて釈明することもできた。だが、それが単なる言いのがれであらうとなかろうと、順序はやはりどう考えても逆でなければならぬとししか私には思えなくなつたのである。

「猫もしゃくしも満州へ」というのが、十五年戦争下の日本人の一つの行動のパターンであつたことはたしかである。つまり、日本人にとって、すでに朝鮮は日本の支配下に完全に組み込まれたものとして、意識の中で処理済みの、過去完了の存在でしかなかったのである。

日本人の多くが、日常的な現実の問題として、朝鮮人に対する極端な差別や抑圧や加害の事実を知っており、みずからもまた加害者の一員として存在しながら、あたかもそれは朝鮮人が受ける当然の処遇であるというようにみなしていたことと、日本人の「満州」志向のパターンそのものはけっして別のものではないのである。だとすれば、かつての時代とはやや趣を異にするものの、今日における「満州」ブーム？　といえるそれへの関心や回顧の状況は、その反面での朝鮮に対する無関心や黙殺と無関係であるはずがない。

私に、そういった「満州」ブームの尻馬に乗るつもりはいささかもなかったにしろ、結果的には、無意識裡の「満州」志向がなかったと断言しうる根拠はどこにもない。大げさに言えば、私は危うく落し穴にはまり込むところであつたのだが、私はついに今日まで、「満州」については

ただの一行も書くことなく過ごしてきたような次第なのだ。もちろん、せっかく蓄えたものを捨てるつもりはないが、少なくとも、朝鮮について、もっと深くもっと広く、たしかな手ごたえで何かをつかむまでは「満州」に手をふれないでいようと思ったわけである。

いささか長すぎる前置きになったが、しかしこのことは、これから述べようとすることがらと分ちがちがたく結びついているのであり、私は理由もなく妙なストイシズムに溺れているわけでは決してない。

2

日本の文学者が、朝鮮またはその民族の生活や風俗や心理などについて書いた作品はどれほどあるのか、その詳細なデータはこの国のどこにも存在しないわけで、そういつた朝鮮にかかわる日本文学の実態については駆け出しの私にわかるはずもないのだが（正直に言って、それを追求している研究者は日本人に一人もいないのではないだろうか）、しかし、私の手にしたり聞きおよんだかぎりにおいてそれはかなり膨大な量にのぼるはずである。もっとも、夏目漱石のように、その紀行文のタイトルは「満韓とところどころ」であっても、どういう理由からか朝鮮については何一つふれないで——つまり、朝鮮を旅しながら朝鮮を書かず新聞連載を中断させてしまったものもあるわけだが、それらの多くはフィクションならぬ旅行記で、それもはじめに少しば

かり記したように、「満州」への途次またはその帰途に立ち寄ったという形であり、そうではなく、朝鮮から「満州」へ足をのばしたという旅行記は皆無に近いという事実を私たちはまず知らなくてはならないだろう。だが、そのことは一応措くとして、たとえそういう態のものであっても、彼等が朝鮮の土を踏んだかぎり、そこには彼等の目に映った何かがあり、それをどういう姿勢によってどのように受けとめたかということとは、それなりに重要なことにちがいない。

ところで、日本の文学者の、朝鮮にかかわる旅行記や小説や詩歌などの主要なものは、大部分目を通した（と思われる）いま、ありていに言って、私はやはりかなり大きな失望を感じないわけにはいかなかった。

もともと私は、近代日本の文学者——つまり、明治から昭和二十年の敗戦までの間に存在した職業的な人々を、多少の例外を除いてはまったく信用していないから、彼等に期待をもつこと自体すでにまちがっているのだが、それにしてもその惨状は目を覆うばかりであるとしか言いようがないのだ。むしろ、そういう予想は、私といえどもはじめから抱いていたことであるから、いまさらべつに驚きあわてることはないのである。もしも、彼等の中の一人でもが、すぐれた作品を残していれば、そういうこと（つまり自身に都合のよいこと）に関してはとりわけ過敏なこの国の文学者や研究者たちは、えたりとばかりにそれをかつぎまわる（その反面、不都合なものについては、それをつきつけられてもシラをきる）はずだから、少なくとも戦後三十年の間、一篇

の短篇小説すら日本近代文学史に登場してこないということは、そのことだけで、誇るに足るものは皆無であり、逆に誇りえないものの氾濫であるという推測は、だれにでも容易に可能なのである。

実際、誇りえないものの作品名なり作者名なりをここに掲げようとすれば、それだけで私に与えられたスペースのすべてを埋めつくしてしまうような具合で、そういうリストを作成することもけっして無意味であるはずはないのだが、絶望（または憤怒）の連続と集積でしかないそういう作業をするゆとりはいまの私にはない。

さしあたって私は、それら無数の惨たる遺産の中から、欠点をもちながらも、かろうじて今日になお生命をつなぎえているものを拾いあげること、この国の文学者の朝鮮へのかかわり方を照射してみようと思うのである。

3

「〔略〕日本の文化は、支那から直接に入ってきたものよりも、この楽浪から入ってきたものの方が多いうですね。何でも残つてゐるものにも、同じ系統に属するものが非常に多いといふことですよ」

「さうですかね」

「何でも碑などにも非常に古いのがあるさうです」

「朝鮮は今でこそ日本の保護国だが、昔は朝鮮の方が都で、日本が田舎だったことがあるんですねえ」

「さうですとも——当時の文化は皆な此方から入つていったものですとも——朝鮮を調べなくては、日本の古代のことは本当にはわかりませんよ」

「新羅とか、百濟とか、高麗とかいふ国の都のあとをひとつひとつ探つて見たら、面白いことが随分出てくるでせうね」

「だから、歴史家は大さわぎして調べてゐますよ。今に、これまでの日本の文化の出所がすっかりわかるやうな時代がやつてくるでせう——」

〔中略〕

平壤の乙密台あたりから眺めた山水の感じは、あくまでも朝鮮で、決して支那でも日本でもないということだつた。北京の万寿山が支那を代表してゐると同じ意味で、乙密台が朝鮮を代表してゐると言つて好いと私は思つた。あの松の多い形から言つても、丘陵が起伏してゐる間に彩色した門やら殿舎やらが立つてゐるありさまから言つても、または大同江が清浅画くがごときシンを眼下にひろげてゐる光景から言つても……。 「實際、あそこに行くと、

本当に朝鮮らしいといふ気がするね。つまり、平安朝、藤原朝の感じがするね。矢張り、日本は昔は朝鮮と同じだったんだね。朝鮮の風俗が、感じが、そのまま藤原朝、平安朝に模倣されていったんだね。日本の昔の京都は、丁度あんな感じがしてゐはしなかつたかな？」私はこんなことを言つた。

引用がやや長くなつたのでこのへんで打ち切るが、これは大正十三年の旅行記である。むろん、これが戦争中の作品であれば、右の引用部などはすべて削除されたにちがいないのだが、しかし、単なる一旅行者であつて、朝鮮の歴史や風俗などについて特に詳しく研究したこともないと思われる日本の作家に、ほとんど直覺的に真実を嗅ぎ当てる能力を備えた者のいたことは、やはり稀有と言つてさしつかえないだろう。言い遅れたが、作者は自然主義の田山花袋である。

あらためて言うまでもなく、引用部分の前半の会話は平壤のやや北部のあたりで、後半は平壤の市中である。「朝鮮の風俗が、感じが、そのまま藤原朝、平安朝に模倣されていった」という花袋は、この少しあとの部分でも、「平安朝時代を味はうと思ふのには、何うしても朝鮮に来て見なければ駄目」だとかえし主張しているのである。前半部分の会話にしても、これはどちらが花袋の言葉であるか不明なのだが、しかしいづれであつても、「朝鮮の方が都で、日本が田舎だつた」ということと、「朝鮮を調べなくては、日本の古代のことは本当にはわか」らないと